本市出身のプロ野球選手・石井琢朗さんが現役を引退

(C)広島東洋カープ

本市出身のプロ野球選手・石井琢朗さん（広島東洋カープ）が今シーズン限りで現役を引退されました。

石井さんは佐野市犬伏上町出身。足利工業高校を卒業後、投手として横浜大洋ホエールズ（現・横浜ベイスターズ）に入団し、３年後に野手に転向。主に三塁手・遊撃手として活躍。

(C)広島東洋カープ

平成２１年に広島東洋カープに移籍し、今年、引退されるまで、通算２４１３試合に出場し、２４３２本の安打（プロ野球史上第１１位）を記録。個人のタイトルとしては、シーズン最多安打を２回、盗塁王を４回。また、ベストナイン５回、ゴールデングラブ賞を４回受賞するなど、「走・攻・守」そろった選手として活躍。平成１８年５月には、プロ野球史上３４人目の通算２０００本安打を達成し、名球会入りを果たしました。

また、石井さんは選手として活躍する傍ら、所属した横浜・広島球団のそれぞれの球場で、佐野市の名物「いもフライ」を紹介するなど市の知名度アップに努めていただいたほか、車椅子を寄贈してくださるなど多大な貢献をしていただいており、平成１８年には佐野市で初めてとなる「市民栄誉賞」を受賞されています。また、平成１９年からは、トップアスリートによるスポーツの学校「琢朗アスレティックアカデミー」を開催するなどスポーツの普及にも取り組んでいます。このアカデミーは現在、市内で毎週木曜に開催されています。

石井さんは今後も野球、スポーツの普及に努めていくそうです。石井さんの今後の活躍にも期待しましょう。

総合防災訓練を実施

９月３０日、佐野市総合防災訓練が、石塚町の旗川石塚緑地で行われました。

訓練では、佐野地区広域消防組合消防本部や自衛隊による本格的な救出訓練のほか、佐野市消防団と栃木県消防防災ヘリコプター「おおるり」による消火訓練も実施されました。

また、今回の訓練では市民の皆さんも多数参加し、避難訓練やバケツリレーなどの初期消火訓練を体験しました。このほか、道路･電気･ガス･水道･電話などのライフラインの復旧訓練なども行われ、各事業者・団体の職員による素早い復旧作業に、会場からは大きな拍手が湧き上がっていました。

訓練エリア外の「体験・展示コーナー」では、炊き出しやＡＥＤ体験、自然災害体験車両、パネル展示などのコーナーが設けられ、家族連れなど多くの来場者で賑わいました。

国土交通大臣から表彰

９月２６日、佐野市地域公共交通協議会が地域公共交通優良団体として国土交通大臣から表彰されました。

この協議会は、公共交通に関わる方々が、バス交通を中心とした公共交通の利用促進や持続可能な仕組みづくりなどを検討するために組織された団体です。この日は協議会の会長である岡部市長が羽田雄一郎国土交通大臣から表彰状を受け取りました。

この表彰は、平成２０年１０月に市営バスを再編し、その後も利便性の向上と効率的な運行のためのさまざまな取り組みやワークショップを通じた、地域住民主体による公共交通の導入を進めてきたことで受賞したものです。

地域公共交通優良団体は、今回、全国で５団体が表彰され、県内では初の受賞になります。

もったいないフェア さの２０１２（10月15日～21日開催）

このイベントはごみの減量と限りある資源の有効利用を図るため、毎年開催されています。

最終日の２１日にはみかもリサイクルセンターの駐車場で、フリーマーケットが開催されました。衣類や日用雑貨、おもちゃなどさまざまな品物が出品され、大勢の来場者で賑わいました。

また午後には、佐野市環境ネットワーク会議の企画により「市民発電所をつくろう！セミナー」が開催され、多くの参加者が地球温暖化や再生可能エネルギー、省エネルギーについて学びました。

この日はほかにも、再生自転車・家具などの提供や、新聞紙マイバックづくり、おもちゃ修理コーナー、電気自動車の展示などが行われました。また、フェア期間中は環境・リサイクルに関するさまざまな講座が開催され、クリーンセンターには連日、受講者が訪れました。

資源には限りがあります。「もったいない」の心でエコを実践し、限りある資源を大切にしましょう。

平和を祈って 栃本小学校の児童が「浦安の舞」を奉納

毎年、１０月２５日の唐澤山神社の御例祭と、１１月第３土曜日の栃本町にある根古屋神社の新嘗祭（にいなめさい）に『浦安の舞』が奉納されます。それに合わせ、舞姫になる栃本小学校の６年生の児童４人が地元の中里フサ子さんと内田ヒロ子さんの指導を受け練習に励んでいます。舞姫の４人の児童たちは「ゆっくりとした動きなので難しい」と話していました。

「『浦安の舞』は皇紀二千六百年を祝い、昭和１５年から日本中の神社で一斉に奉納され、現在栃木県内で奉納している神社は少なく、しかも本装束で地域の子どもが舞うのは唐澤山神社だけです」「今まで伝承されてきたことは地域の皆さんのおかげであり、とても素晴らしいことです」と唐澤山神社権禰宜（ごんねぎ）の髙橋由香さんが話されていました。髙橋さんご自身も、毎年のように明治神宮で舞の指導を受け、伝承のために勉強を続けているとのことでした。

根古屋神社のお祭りの翌日・１１月１８日にも、栃本町の秋山川緑地公園で行われる栃本コミュニテイ祭で『浦安の舞』が披露されます。（市民記者　中里聖子）

佐野弁 ばんざい

色や音から生まれた方言 -烏瓜（からすうり）とさいかち-

形から生まれた烏瓜（からすうり）の方言と、果実の音から生まれたさいかちの方言について述べてみましょう。

烏瓜は蔓草（つるくさ）で、山や野原に生えている木に絡（から）みつき、夏には6、7センチの楕円形（だえんけい）の果実をつけます。晩秋になると、その実が熟し真っ赤になります。蔓（つる）に垂れ下がっているその実を好んで食べる烏（からす）は、その周（まわ）りをくるくる回ることから、烏瓜をカラスポッグリ・カラスチンゴ・カラスノキンタマなどと呼ぶようになりました。いずれの方言も「烏の金玉」を連想して作られたものです。

さいかちは山や河原などに成長する高木で、秋になると長さ30センチほどのゆがんだ莢（さや）が垂れ下がります。莢には平たい種があって、熟すと茶色になり木から落ちてきます。その莢を振り動かすとガチャガチャとかガラガラと音を立てることからその音がさいかちの方言になりました。

この種を水の中に入れると、石けんのようなはたらきをし、皮膚をなめらかにするというので、化粧用としたり、昭和の初め頃までは洗顔用とすることもありました。また、野上地域では、火にいぶしたガチャガチャを、トブグチにさして置くと魔除けになるという信仰的な風習もありました。さいかちの果実は日常生活には大切なものでしたが、今ではその木も見かけないし、方言も消えてしまいました。

（市民記者　森下喜一）